



日野範綱卿の家来

稚児

慈円僧都の家来

世の無常を表し
出家を祝福する桜

親鸞聖人の乗ってこられた牛車

舎人
(警備や雑用を行う人)

お供の人

親鸞聖人近習

牛車をひいた牛と牛飼童

日野範綱卿の馬と従者

【第一幅・第一図】

出家学道



親鸞聖人のご出家

『御伝鈔』のあらすじ

親鸞聖人は、藤原氏の流れをくむ貴族の日野家出身であり、父の名を日野有範といいます。もし朝廷に仕えていたなら、栄華を極めていたことでしょう。しかし、仏教を広め、多くの人々を幸せにしたいという思いから、出家をされました。

『御伝鈔』（上巻・第一段）

絵の中の桜は春という季節と、世の無常が表現されています。その桜の元に牛車を乗り捨てておられることから、無常の世を厭い、真実を求めてご出家なさったと味わうことができます。

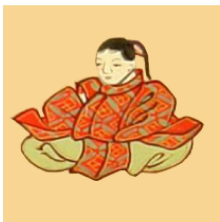


「御絵伝」のあじわい

第一図は、一一八一年の春、松若丸様（親鸞聖人の幼名）九歳の時、伯父の日野範綱卿に連れられて京都青蓮院の慈円僧都の元でご出家なさった場面です。ここでは、もうすでに松若丸様は慈円僧都の坊舎に入室しておられ、そのお姿は描かれていません。門の外では松若丸様が乗ってこられた牛車や、牛車を牽引してきた牛、またその牛を世話する人が描かれています。松の右側には範綱卿が乗ってこられた馬の姿もあります。

門の内側には、烏帽子をかぶり狩衣を着ている人物が描かれています。これは慈円僧都の家来です。何を喋っておられるのかは想像の域をでませんが、「松若丸殿のご出家、確かに承り候」とでも言っておられるのかもしれない。またその前には松若丸様の付き人として稚児の姿があります。その他にも門の内外に数人のお供の姿があります。

この絵図では大勢の人物が描かれており、松若丸様が貴族の出身であることを表しています。その暮らしを捨て、わずか九歳でご出家なさったということは、それだけ大きな覚悟をもって仏門に入られたことがうかがわれます。



稚児とは？

鎌倉時代、七歳から十二歳ぐらいの少年を、行儀見習い等の目的で貴族や寺院に預けていました。これを「稚児」と言い、「御絵伝」には稚児が度々出てまいります。